

大会企画パネルセッション

私立高校での日本語教育と教材  
—正規科目としての日本語教育カリキュラムから—

河上 加苗（白鵬女子高等学校）

1. 教材開発の背景-主体育成を目指したホリスティックな日本語教育カリキュラム

発表者が見てきた日本語を学ぶ高校生の日常には、ボーダーレスで複層的なコミュニケーションが展開されています。彼らは、自分の学び場を選択し、戦略的に自分のもつ言語資源や言語環境を駆使し、時には、たくみに利用しながら存在しています。同時に、彼らの多くは、社会で何をしたいのか、自分は何ができるのかがわからないという不安、高校より格段に難しくなる進学先の授業とそこで使われる日本語に対する不安などを感じながら高校生活を送っています。彼らと関わる中で、従来の、日本語母語話者を基本とした「不足部分を補う教育」、成績優良者を基本とした「成績不振を補う教育」では限界があり、むしろ、彼らの人間としての成長を、どのように日本語教育の分野から支えるのかが、高校生に対する日本語教育に必要な議論と考えるようになりました。近年の、年少者日本語教育をホリスティックに捉えようとする流れを鑑みると、自己表現や進路選択をサポートするキャリア教育の視点も必要になってきます。発達段階を考慮し、日本語力を育て、進路選択を見据えた目標達成型のカリキュラム、同時に、過去の経験を踏まえて自分の複数言語環境を肯定的に捉え、ことばを使った対話を通じて、自己を含む「社会」をさらに拡大し/再構築していくという、子どもの主体育成を目指したホリスティックなカリキュラムが重要だと考えています。

2. 教材について

高校生への日本語教育カリキュラムと教材を考える際に参考にしたのが、「ユニット教材」という考え方は、「ユニット教材」とは、「実践的教材論」（川上、2011:126）を理論的な背景とし、重視する点、3つの観点を支柱として開発された教材です（表1）。共通のテーマをもって行われる複数回の授業案とその教具、補助教材の総称で、複数回の授業が一つのまとまりを持つユニットとして実践の場に提供されます（人見・河上、2015）。「ユニット教材」は教科書という形を採らず、様々なユニット教材をモジュールのように組み立てていく実践の方法論とも言えます。

理論的な背景	実践の中で実践者と学習者の間において学習者にとって意味のある教材が生まれる瞬間に、学習者の主体的な学びが生まれるという教育観（「実践的教材論」（川上2011））
重視する点	①活動の中で日本語を学び、文脈の中でことばを使う体験をする ②複数回の授業で、学びの文脈をつくる ③子どもが他者との関係性を考えて、インタラクションをつくる
各「ユニット教材」の3つの観点	「日本語教育的観点」：文法知識や語彙等を単に積み上げていく教授法を越え、彼らの成長発達、ことばの力の把握、「複言語性」に注目。 「キャリア教育的観点」：自らの人生を主体的に形成することを支え、社会の広がり配慮。他者とことばのやりとりを通して、社会を築き、そして社会を拡大させていく中で、自らの役割を見出すこと。そのために、言語や教科、職業に関する知識や技能を身に付けること。 「学校教育的観点」：「生きる力」を育むための各教科との関連を配慮し、これらを言語活動の中で展開する。

表 1 ユニット教材の概要

3. 高校でのユニット教材について

3.1 実践の概要

実践校は神奈川県にある全日制の私立白鵬女子高等学校です。2014年に早稲田大学大学院日本語教育研究科と協定を結び、入学から卒業までの3年間の日本語教育カリキュラム開発に向けて取り組んできました。日本語の授業は、正規科目として設置され、現在はユニット教材とアカデミック・ライティングの2本柱で展開しており、2019年度では20のユニット教材をモジュールのように組み立ててカリキュラムを計画しています。生徒には学習のめあて、予定表、ワークシート、文法ノーツなどを冊子にして配布しています。

3.2. ユニット教材例（【スピーチから学ぶ】）

この教材は毎年二学期に実施している日本語発表会の関連ユニットです。生徒たちは同年代（当時）である、マララ・ユスフザイのスピーチの映像／日本語のスク립トを教材とし、そこから、スピーチの特徴を学び、語句・表現を学び、社会背景や社会問題を理解し、その問題について自分の意見を作り出していきます。そして、自分にとって心に残

授業案名	概要	主な学習項目など
スピーチから学ぶ	<p>■概要 このユニットは、毎年二学期に開催している日本語発表会の関連ユニットと位置づける。スピーチ力の育成を目的とし、同年代、同性の優れたスピーチ例からスピーチの特徴を学び、日本語で分かりやすく伝えるための基礎的な日本語力および作文力、スピーチ力の育成を目指す。さらに、スピーチ発表会の企画・運営を学習者自らが実践し、実践を通じて他者とやりとりをしながら必要な表現や語彙、待遇表現を学び、公の場での話し方を学ぶことを目的とする。</p> <p>■ねらい、育成することばの力 日本語の文章、複文を理解し、使用することができる。 スピーチの特徴を知る。世界で起きている問題を知り、自分の考えをもつことができる。 スピーチ発表会に必要な語彙や表現を使って、公の場で他者を意識して話す・書く。</p>	<p>(読解内容より) 光栄、尊敬、人生、すばらしい、瞬間、名誉、平等、扱う、感謝、回復、祈る、純真、祈り、癒す、活動、権利、声を上げる、女性、人権、活動家、ソーシャルワーカー、訴える、教育、平和、平等、目標、達成、闘う、テロリスト、奪う、傷つける、尊厳、均等、タリバン、額、銃、銃弾、黙る(黙らせる)、失敗、沈黙、変更、志、阻止、除く、弱さ、恐怖、絶望、強さ、力、勇気、抗議、個人的、復讐心、目的、主張、過激派、撃つ、兵士、憎む、撃つ、予言者、モハメッド、キリスト、ブツダ、慈悲、マーティン・ルーサー・キング、ネルソン・マンデラ、ムハンマド・アリー・ジンナー、受け継ぐ、変革、財産、ガンディー、バジャ・カーン、マザー・テレサ、非暴力、哲学、許し、魂、穏やか、暗闇、光、大切さ、沈黙、声を上げる、ことわざ、真実、恐れる、ポリオ、研究者、殺害、破壊、平等、ジャーナリスト、尋ねる、シンプル、ちっぽけ、取るに足りない、……など</p> <p>・連用修飾「こと」、連体修飾、意向形、命令形、スピーチに出てくる表現</p>

表 2 ユニット教材「スピーチから学ぶ」概要、主な学習項目

るスピーチを探し、メッセージを読み取り、全体で共有するという活動を行なっています。授業は全10回で展開されます。表2はユニット教材の概要、主な学習項目です。

4. 教材とカリキュラム

入学から卒業までのカリキュラムで重視したのは、自分は何を考える人で自分はどうか生きるかという問いを3年間考え続けるということです。そして、教材作成で意識したことは、高校生の発達段階です。青年期は自己のアイデンティティを獲得する時期／自我の目覚めの時期であるとされます。彼らの自己形成を支える教材はどうあるべきか、そして、彼らがことばを学ぶ文脈はどのようなものか、高校生にとっての学ぶ内容は何か。これらを意識しながら教材を作成してきました。今後も日本語を学ぶ高校生にとっての内容は何かを考え続けたいです。

付記

ユニット教材は2015年度、2016年度早稲田大学教育総合研究所公募研究助成費による研究成果の一部である（研究代表：川上郁雄、池上摩希子、人見美佳、河上加苗）

【引用文献】

川上郁雄（2011）『「移動する子どもたち」のことばの教育学』、くろしお出版  
 人見美佳・河上加苗（2015）「初等中等教育レベルの「教材」を捉え直す―「ユニット教材」の提案―」『ジャーナル「移動する子どもたち」―ことばの教育を創発する―』6、1-26. [http://gsjal.jp/childforum/journal\\_06.html](http://gsjal.jp/childforum/journal_06.html)